
五〇日目の朝

yolu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五〇日目の朝

【Nコード】

N2229Z

【作者名】

you

【あらすじ】

カメラ女子の千枝子が撮った一枚の写真。

たまたま写してしまった心霊写真から始まる話。

今にも涙が落ちそうな雲が埋め尽くし、秋に差し掛かった頃もあって、そよ風も少し肌寒い。

千枝子はチエックのストールを巻きなおして、重い空を眺める。

彼女の手の中には、デジタルカメラがある。

今流行の『カメラ女子』というヤツだ。

だがそれほど凝ったカメラではない。扱いやすいコンパクトデジタルカメラというものである。

普段どおりに道をたどっていると、ガードレールが延々続く道路にでた。

彼女のお気に入りの場所だ。

空と地面が二色にわかれたような景色が広がる。ラインのように引かれたガードレールが、まるで交わることもない他人の流れのようで、すれ違う人の心のように、都会の寂しさを切り抜いた、そんな景色だ。

今日は曇り空なので、全てが灰色に染まり、大して面白みもないだろうとカメラの画面を覗き込んだとき、彼女は驚いた。

雲は波のようにながら濃淡を描き、冷えたアスファルトはいつもよりも濃く見える。湿度のせいだろうか、深い影がじつとりとアスファルトに染み込み、電柱の高さが際立っている。

千枝子は夢中でシャッターを押した。

何枚撮っただろう。手元の数字は軽く七〇は越えている。写真を確認したいが、ゆっくり眺めたい。

そう思ったとき、この道路の脇に公園があるのを思い出した。彼女はカメラを抱え、公園へと向かった。

千枝子は剥げたベンチにあぐらをかき、先ほどとった写真を確認し始めた。メモリをそれほどもってきていないため、ブレている写真や、構図が嫌いな写真など削除する作業にかかる。

リズムカルに確認・消去を繰り返していたとき、千枝子の手がぴたりと止まった。

素人でもピンとくる写真はある。

だが、うめき声に近い声を千枝子は上げた。

「ああ〜あああ……」

いい写真なんだけど、あああ……」

電柱の下に、写してはいけないものが写っていたのだ。

供えられた花だ。

さらに、追い討ちをかけるように、薄く白っぽいヒトらしきものも写っている。

「あああ……どなたかしら、これ……」

ふと顔を上げたとき、千枝子はベンチから転がり落ちた。

目の前に顔があったのだ。

が、それが、人じゃないとすぐにわかる。

追い討ちをかけるように、

『俺、写真うつりいいじゃん』

声が聞こえるが、頭に響いてくる。

そう、カメラの中にいた、白っぽい人。

いや、人じゃない。

ちよっと前まで人だったヒトだ。

「ちよ……まじ……うつりいいとかって……」

『……え、ちよ、こっちこそ、まじ？』

俺の声、聞こえちゃってるの……？』

「ええ、まあ……」

『あー……ご愁傷様』

「それはこっちのセリフ」

千枝子は思わず返すが、そう返せるほどに相手は自然で、そしてはつきり見える。

何より、怖くない。

「いったい、どうなってんの？」

落ちた身体を起こしながら土をほろい、ベンチに腰掛けなおすが、隣に半透明の男も腰をおろした。

『俺のこと写しちゃったからじゃない?』

『こんなハッキリうつちやうもん?』

『さあ…? あの場所撮った人、警察ぐらいだからね』

普通に会話ができることに頭を抱えながら、千枝子はふと、頭の中で声を出してみる。

聞こえますかー?

見てみたが、頭をかしげるだけで、聞こえてはいないようだ。

このままだと、盛大な独り言になりかねない。だが声を出さなきゃ話にならないようなので、千枝子は渋々声を出そうとするが、何を話したらいいのだ?

とりあえず、自己紹介。

「…えつと、私は千枝子。

あなたは?」

『たけし』

マジマジと相手の顔を見て、千枝子は噴出した。

「たけしって顔じゃないよね」

『よく言われた』

「過去形にしちゃうところが、幽霊って感じ。」

つか、ノビタとデキスギ君を足して2で割った顔だよね」

『意味わかんないんだけど』

『ようは、フツウ』

『そうですか。』

ま、何かの縁だから、俺が天国行くまでの間、よろしく頼むよ』
「え?」千枝子は意味が分からず、変な声を上げた。

『四十九日を明日で迎えるんだ。』

だから、明日、天国に行く日なんだよね』

たけしは嬉しそうな笑顔を浮かべて言った。

千枝子は小さく頷き、

「そつか。明日行っちゃうんだ。
つか、なんか心残りがあるから、私のカメラに写ったとかあるんじゃないの？」

映画とかであんじゃん」思いついたように言うが、たけしはキツパリ言い切った。

『特にない』続けて、『俺、連れ子だし、親はスッキリした感じ？あと、俺のこと轢逃げしたやつ捕まってるし。』

早く転生して、新たな人生を歩みたい』

「うわあ、ちようポジティブ」

千枝子は関心しながら言うと、今度はたけしが思いついたのか、『そつちこそないの？』

なんか神が最後の日に何かしないと天国に行かせない試練みたいな』

千枝子は一瞬考えたが、

「特にない」続けて、「彼氏がいないぐらい。でも、そんなのどうでもいいし」千枝子は空を仰いだ。

やはり、重たい雲が浮かんでいる。

空の蒸気が黒く漂っているだけなのに、気持ちが重いと全てが鉛色に見えてくる。

『もうすぐ雨が降るよ？ 傘は？』

「そんなの持ってきてないよ」

『したら急いで。あと五分で雨が降る』

「なんでわかるの？」

『幽霊だから』

そういわれると、納得するしかない。

千枝子は慌てながら、かばんにカメラを詰め、腕時計を見やり、次のバスがあと三分後だとわかると、短距離走のスタートダッシュさながらに駆け出した。

頬が冷たい。雨が落ちてくる。

雨だれに逆らうように駆けたせいで、肩が大きく揺れるが、あと

一分程度で来るはずだ。雨と腕時計を交互に睨みながら、彼女はバスが来る方向を見やった。

白いバスが流れてきた。千枝子を見つけると、目の前に入り口が現れる。軽く雨粒をほろい、バスへ乗り込むと、腰が落ち着かないうちにバスは再び走り出した。

千枝子は景色が流れる外を見ながら、しゃんしゃんと雨を巻き上げる音を聞く。一番後ろの席は雨の音がよく聞こえて好きなのだ。ふと横を見ると、何故か隣にたけしがいる。

「なんでいるの？」小声で聞くと、

「なんか、心配になつて」…なにが？」

「いいじゃん。どうせ明日までなんだし」

千枝子は小さく頷き、遠くに視線を投げた。

『俺が轢かれた日もこんなだった』たけしがおもむろに話し始めた。

急な話に千枝子はたけしを見るが、たけしは自分のつま先に視線をくりつけたまま、話を続けた。

『あの道をたまたま歩いてた。』

したらトラックがハンドルを切り誤つて、俺だけを跳ね飛ばしたんだ。

一瞬すぎて、痛みも何も感じなかった。

ただ、顔に当たる雨が冷たかったのを覚えてる。

死ぬんだなつて思った。

まあ、人間つて呆気なく死ぬもんだけど、スパツと死ぬとそんな未練もないもんだよ。

つて思つてることが、未練なのかな……」

千枝子に話しているのはわかる。

だが、自分自身に言い聞かせているようにも聞こえる。

最後の夜になるのだ。この世という風景をみる最後の日。彼は四十九日の間、たった一人で自分の結果を見つめてきたのだ。

独りで。

それに気づいたとき、千枝子は、

「頑張ったね」

たけしは驚いた顔をした。

『フツウだよ』初めて笑った気がする。

いや、笑顔を作ってはいたが、心の底から笑顔なのは初めてだ。

座席は込み始めたが、どうしてか、彼の場所だけは誰も座らない。みんなにも見えているのだろうか。

『無意識に避けるんだよね。面白いよね』

千枝子が思っていたことに気づいたようだ。

「ほんとに」答えたとき、降りる停留所のアナウンスが響いた。

千枝子がボタンを押すと、一〇分としないうちにバスはゆっくり停車した。相変わらず雨は強かに落ちていている。

停留所からマンションの自動ドアまで千枝子は走って逃げてきたが、鞆を濡らさないようにするのは大変だった。

『もつと早く俺に出会っていれば、濡れなくて済んだね』雨の中を悠々と歩きたけしをみながら、

「つか、私の部屋までついて来るの？」

『だめ？』

「……あんまし、綺麗な部屋じゃないけど」

千枝子はブツブツ呟きながら、部屋のドアまで行き、ロックを外した。

「どうぞ」

幽霊に向かって扉を開けるのは、これで最後になるだろう。初めてで最後。不思議な気分だ。

彼は意気揚々と部屋へ乗り込んでいく。

『意外に殺風景だね』

「あんましモノ置くの好きじゃないから」

居間にあたる部屋には、真ん中にテーブルと座椅子が置かれているだけで、他に目だって何も無い。もうひとつ部屋が奥にあるが、机とベッドと本棚が一つ並んでいるだけで、やはり、何も無い。

『彼氏にでも振られた？』『なんで？』

千枝子は冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターをヤカンに注ぎ、火にかけた。

『捨てた感じがする』

「幽霊つて何でもお見通しなの？」

千枝子は笑いながら、カップを二つ用意し、インスタントコーヒーを入れる。

「彼氏はいないから振られようもないんだけど、大半のものを捨てたのは本当」

戸棚の奥から買い置きしていたクッキーを取り出し、皿にあげた。
『なんで？』『むしゃくしゃして』

クッキーの皿をテーブルの上にだし、千枝子は座椅子に腰を下ろした。

「立ってないで、たけし君も座つたら？」

言われるままに座る。そこにすかさず千枝子はクッションを差し出した。

「どれだけ感触があるかわかりませんが、座布団にしてください」

『ああ、お気遣いなく』

ヤカンが唸りだした。

よいしょと声を上げて、千枝子は立ち上がると、カップにお湯を注ぎ、運んでくる。

一つがたけしの前に置かれた。

「一人で飲んでもつまらないから。」

形だけでもどうぞ。お客さんだしね」

千枝子は微笑む。

だが、違和感がある。

心配の理由がわかった。

疲れた笑い方をしている。

『だいじょうぶ？』

「何が？」

『全部』

千枝子は声を出して笑った。

笑うがそれは何かをはじき返すような、そんな声だ。だが、ひとしきり笑ったあと、ふうと溜息を吐いた。

「実は……」

「……疲れちゃったんだ」

『うん』

「何か、疲れちゃった。」

もう、いいやってなって、昨日、いらないうって思うもの、全部捨てたんだ」

『うん』

「私、何していいかわかんなくて、何も出来ていない気がするし、何もやっていない気もするし、」

「……うん」

部屋の空気が重く固まったとき、たけしははっきりと言った。

『死にたくなかったんだ』

「……うん」

千枝子は膝を抱えて、顔を埋めた。

死んだ人に何を言っているんだろうと思う。

自分より生きたかったはずなのに、自分はなんてことを言っているんだろうと思う。

「……うん」

誰に聞いてもらうことも出来なかった。

ただ、自分の中で閉まって、閉じ込めて、蓋をして、隠して、離して

「……うん」

死ぬという安堵に、とても惹きつけられてしまっただけで、どうすることもできなかった。

「……うん」

何かが変わるかもしれないという希望。

楽しい気分にし少し浸れたけど、でも、すぐに目の前が暗くなる。
瞼を閉じたときのるように、暗い。

こみ上げた涙が止まらない。

そばに誰かいるというのは、心地がいいものなんだと、初めて感じる。それが幽霊でも、そこにいるのがわかるだけで、自分が生きていることがわかる。

だけど、もう、疲れた

肩に何かに乗った。

『頑張ったね』

彼の手と笑顔がそこにあっただ。

「頑張ってたね」より、欲しかった言葉。

頑張ってるんだもん。

頑張ってきたんだもん。

どんなことでもいいから。

小さなことでいいから。

自分を見て欲しかった。

そう気づいたとき、溢れた涙は止め処なく頬を伝う。

「ごめん」

ふと出た謝罪の言葉に、たけしは首を横に振った。

『謝らないでよ』それだけいうと、たけしはただ膝を抱え込んだ干枝子の手を握っていた。

温かみも感触もない。だが、握っているという感覚がする。

それはとても優しく、風のように、春の日差しのように、でも五感では感じられないものである。

その優しい感覚のなかで、いくつ時間が経っただろう。

コーヒーが冷めてしまう時間は過ぎていた。
たけしはいつの間にか千枝子の隣に座り込み、彼女の肩に頭を預けている。

落ち着いたのか、千枝子は鼻をかみながら、身体を寄せているたけしに言った。

「……なに、懐いてんの？」

『俺、猫になるかな、千枝子ちゃん家の』

『転生するんじゃないの？』

『別に人間になりたいなんて言っていないし。』

つか、こうやって二人でいれば、千枝子ちゃん寂しくないし、俺のためにご飯を運ばなきゃいけないなくなるし、死にたいなんて思うこともなくなるかなって』

「猫なんかより、ご飯作れる男がいい」

泣きはらした目をこすりながら、千枝子は笑う。

どこかスッキリした笑顔だ。

ござっぱりした部屋の中で、二人は笑いあった。音としては千枝子の声しか響いてないかもしれない。だが、部屋の中では二人の声がコロコロと回っている。

恋人同士というわけでもなく、友達同士というわけでもなく、どう表現すべきか。

戦友とでも言うべきか。

互いに、死ということに向き合ってきた者同士だ。どこか分かりあえる箇所がある。

「……なんかお腹空いてきたかも」

『しばらくご飯、食べてなかったもんね』

「そんなこともわかるんですか」

『いや、冷蔵庫見たら、なんもなかったからさ』

幽霊って万能じゃないね。言いかけてやめた。形がなくても人なんだと、改めて思う。

「早く会ってたら、どうだったかな」

千枝子がもらした。

改めて冷蔵庫を覗くが、何もないことにかわりはないので、戸棚からペンネを取り出し、調味料の引き出しからカルボナーラの Pasta ソースを抜き出した。

『……たぶん、会えてない。』

だって、俺、彼女いたし』

鍋に水を張り、火をかけて、彼女の手がぴたりと止まる。

「もう一回、泣けるかもしれない」

彼女はたけしを見てニタリと笑うと、

「なんてね」

たけしもニタリと笑う。

いい友達になれたのに。

急に、心に言葉が浮かんだ。

たけしと目が合う。

驚いた顔を二人で作るが、敢えて言葉にはしなかった。言葉にしたら、この繋がりが消えてしまいそうな気がしたからだ。

そうこうしているうちに、食材が食べ物に変化していく。

白く大きな皿の中央に、こんもりとペンネが積み上げられ、カルボナーラソースが綺麗にからんでいる。さらに小さな小皿にペンネを取り分け、たけしの前に千枝子は置いた。その横にフォークも添えられている。彼女はもう一つの小皿にペンネをよそうと、フォークを握り、いただきますと呟いた。

「彼女の得意料理なに？」言いながら、ペンネを口に運んでいく。

『俺の彼女、料理しなかった。部屋もこんなに綺麗じゃないし』

「そっかあ…それは残念」

『だって、こんなに気が利かなかったし』

「なにが？」

『これ』たけしは自分によそわれた皿を指差す。

「食べたいかなって思ったから。」

「なんだっけ、陰膳？」

『それを言うなら、靈膳。』

「陰膳は出張とかで不在の人に出すやつ」

「そうなんだ」

彼女は恥じることもせず、ペンを頬張る。

『なんで彼氏いないんだろね』

「ご縁の神様に聞いてきて」

楽しい食事の時間は過ぎていく。

ゆっくり、いろんな話をした。とりとめのないものから、これらのことを含めて。

そして、敢えて二人は時計を見なかった。

時間という縛りは、今欲しくなかった。

ただダラダラと、笑い話から悲しい話まで、限りある時間の中で互いの距離を縮めたかった。

だが、地球は容赦なく廻る。

カーテンが白く光り始めたことで、朝が来たことを知る。鳥の囀りが聞こえ、電車も動き出した。

「さて、朝になったし、どこか行きたいところある？」

『死んだ場所に行きたい』

千枝子はうんとだけ言い、身支度を整え始めた。久しぶりに時計を見ると、9時を指している。

「けっっこういい時間なんだね」言いながらも、今の時間はちょうどバスがない。

「歩こうか。三〇分ぐらいだから」

たけしは微笑んで、小さく頷いた。

並んで歩き出し、何気に横を見るが、意外と背が高かったことに驚いた。

「身長いくつ？」

『一七七だったはず』

「意外と大きいんですね」

『千枝子ちゃんは意外と小さいんですね』

そう言ったあと、彼の足がピタリと止まった。

いつの間にか目的地に到着していたようだ。

しかし、先客がいる。

『恵美だ…』低い声だった。

何かに驚いたような、絶望したような、そんな声。

よくみると、隣に男がいる。

近づいていくと、声が聞こえた。

「恵美ちゃんて優しいね。」

友達のお参りするなんて「

「いい友達だったから、今日で四十九日だし、お参りしようかなって」

「友達なんですよ？　なんか妬げちゃう」

「何言ってるの？　サトルだけだって」

千枝子も呆気にとられていた。

あの女はたけしの元カノだろう。掃除も料理もできなかった女だ。

だが男作りは得意なようだ。

ムカツク。千枝子の声が低く響いた。

それと同時に千枝子の足は恵美という女の元へぐんぐん向かっていく。

たけしの呼び止める声が千枝子の胸に響いてくるが、止まることはない。

「ちよつと、恵美さんだよね？」

「はい？」

女が振り返ったと同時に男も見下ろしてくる。

「たけしの元カノだよね？」

「何言ってるんですか？」男のほうが返してきた。

「恵美さんに聞いてんだけどさ。」

左の胸の下に大きな痣があるってたけしが言ってた。

そんなこと、男友達に教えるんだ、恵美さんって」

男の視線は鋭くなるが、当たっているのか、恵美のほうに視線が泳ぐ。

「ちよっと、やだ…なに……」

「悪いけど、親友の最後の場所を、

自分の高感度稼ぎに使わないで」

恵美の目が動揺という色で染まっている。

男の目は猜疑心の色で染まったようだ。

千枝子は鼻で笑うと、振り返った。

たけしが驚いた表情のまま立ち尽くしている。

「行く」

千枝子はたけしに微笑みかけた。そして、掴めないだろう手を握って、歩きだす。

さらに驚いた顔をたけしは浮かべるが、そっと握り返してきた。

春の日差しの心地がする。

秋の肌寒さを感じられない。

後ろで口論が始まったのを聞き、二人は噴出すと、公園まで小走りで向かっていった。

『びつくりしたよ』

「私もびつくりしたけど、あーいうの、すんごく許せないんだよね」

『気持ちわかるけど、だけど俺のために。』

なんかごめん』

「謝らないでよ。謝るぐらいなら感謝して」

昨日出会ったベンチに腰掛け、千枝子は鼻をならして言った。

たけしはおもむろに千枝子の頭をぐちゃぐちゃと撫でる。が、髪が乱れることはなく、仄かな感触がさわさわと髪に触れる。心地のよい空気が伝わってくる。

急に、強い風が吹いた。

風につられるように、たけしが上を見上げたので、彼女もつられて視線を上げた。

灰色の空だが、一箇所だけポツカリ穴が開いた場所がある。たけしは小さく、『あ、』とこぼすと、『行く時間だ』呟いた。空気が切れる音がした。

耳鳴りがしたのだ。細く高い音が頭の奥に響いてくる。

千枝子は耳鳴りの痛みに一瞬目を瞑り、そっと目を開けると、たけしと千枝子以外のものが全て止まっていた。

そう気づいたのは、鳥が空に浮かんだまま、微塵も動かないからだ。

「こんなに唐突にさよならになるんだね」

たけしは寂しげな表情を浮かべ、俯いた。

『神様って意地悪なんだね』千枝子が返すと、二人は一緒に笑いあう。

ひとしきり笑ったあと、たけしはひとつ息を吐き、言った。

「千枝子ちゃん、ありがとう。」

千枝子ちゃんに逢えてよかった」

千枝子も手しか見えていなかった視界をぐっと持ち上げ、言った。

『私もたけし君に逢えてよかった。』

こんな素敵な体験、ありがとう』

「また、会おう」

『そうだね、またね、たけし君』

おもむろに伸びた互いの手は、力強く握りあった。温かい握手であり、手が白くなるほどの強い握手でもある。

初めて感じた相手の感触と、くつきりと象られたたけしの姿がとても凛々しく見える。

二人は微笑えみあった。

とても温かな時間。

千枝子はひとつ瞬きをした。

もう姿はなかった。

虹のように消えることはなく、
余韻など残すことなく、
電源が落とされたテレビのように、
その場所からたけしは切り抜かれていた。
跡形もない。

ただ、春の心地が手に残っている。

千枝子は手のひらを見つめると、

「いつてらっしやい！」

空に向かって声を上げた。

翌日。

彼にとっては、死んでから五〇日目。

逆に言えば、天使になって一日目。

千枝子の場合は、彼と出会って二日目。

一人に戻って一日目。

ちなみに、ズル休みは二日目だ。

毎日の積み重ねだが、同じ意味を持つことがない毎日なのだ、
改めて感じる。

そう、意味が違う

千枝子は身支度を整えると、首にカメラをぶら下げ、昨日の場所へ
と行ってみた。

あの日と同じように、カメラのシャッターを切り続けるが、どの構図を撮っても彼が写ることはなかった。

「奇跡は二度も起こらないよね……」

彼女が呟いたとき、足元に何かが触れた。

仰け反るように足元を見ると、黒い子猫が甘えた声で擦り寄ってくる。

「たけし君……なの……?」

猫は小さく鳴いた。

だがタイミングよく鳴いただけのようだ。

第一に転生しようにも、三ヶ月は過ぎているだろう子猫にはなれないはずだ。

彼女は屈んで、子猫の小さな頭を撫でたとき、後ろに気配を感じる。

春の香りがする。

彼女は振り返らなかった。ただ、懐かしい気持ちが胸に広がる。

「君の名前、剛田君ね」

千枝子は小さな猫を手の中にくるむように持ち上げる。猫は逃げることなく、ゴロゴロと甘えて鳴いたとき、春の心地が頬を過ぎた。

千枝子は笑顔を浮かべた。

彼を見送った笑顔と同じ笑顔。

今日から、剛田との一日目が始まる。

そして明日は、また別な意味の一日目になるはずだ。

「もういっちょ、がんばってみるかっ」

剛田を抱えて彼女は呟き、初めての一步を踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2229z/>

五〇日目の朝

2011年12月8日01時00分発行